

藤原頼通の時代と文化世界

【趣旨】

『更級日記』の作者・菅原孝標女は、藤原頼通の時代を生きた人でした。藤原道長の息・頼通の時代は、後一条・後朱雀・後冷泉天皇と続く、三代・五十一年にわたる長期政権のもと、数々の文化活動が展開された時代でした。とりわけ後冷泉天皇の時代には、皇后寛子・中宮章子内親王・女御歆子を戴く内裏後宮を始め、斎宮・斎院や宮家などにおいて数多の文化活動が営まれ、活況を呈しました。

和歌においては勅撰集こそ編まれませんでした。『栄花物語』に見られるように、内裏歌合が再興され、高陽院水閣歌合や皇后寛子春秋歌合などの晴儀歌合から私的の歌合に至るまで、大小様々な歌合が開催されたことは、『廿卷本類聚歌合』に記録されているところです。相模や能因が歌壇を主導する中、伊勢大輔・出羽弁・橘為仲・康資王母・小弁・藤原頼宗・源経信といった歌人らが活躍したのもこの時期です。藤原範永を始めとする和歌六人党の革新的な作歌活動も注目されます。『四条宮下野集』『出羽弁集』には、時に『枕草子』的とも言われるような女房と男性官人との歌による密接な交流が窺えます。一方、物語文学に目を転じれば、六条斎院祓子内親王の「物語合」の開催に見られるように、新しい物語が競作されました。『狭衣物語』には和歌と散文が融合した当代一流の表現が見られます。『更級日記』はそうした時代に書かれた日記でした。これら貴族社会における文化活動の多くが、文芸に理解のある頼通によって牽引され、領導されたのです。頼通の時代はまさに王朝文化の爛熟期であり、頼通の時代を考察することは、広く平安時代の文化文芸を考えることにもつながると言えます。

今回のシンポジウムでは、頼通の時代を概観するとともに、同時代の文学テキストから見えてくる様々な文化現象に着目することで、「頼通の時代を考えると何か」をめぐって、問題意識を共有していくことを目指します。歴史、文化、宗教、建築、美術、等々、様々な領域から注目されている中、文学研究の側から何を明らかにしていくのか、問いかけていきます。

日 時 平成28年8月20日(土) 13時開場

会 場 早稲田大学 3号館602教室

基調講演 13:30～14:20

趣旨説明 東北大学 横溝 博

藤原頼通の文化世界 —文化発信と知の共有の基層—

流通経済大学 和田律子

報 告 14:40～15:55

和歌宰領者としての頼通 —和歌六人党藤原範永という視座から—

都留文科大学(名) 加藤静子

頼通時代の後宮文化 —『四条宮下野集』とその周辺—

流通経済大学 高橋由記

作り物語の〈時代〉 —『狭衣物語』成立の背景—

奈良教育大学 有馬義貴

司会：東北大学 横溝 博

ディスカッションと質疑応答 16:15～17:00